

# メキシコ人の対日イメージ

## 国 本 伊 代

### はじめに

1987年から88年にかけて1年間メキシコ市で生活する機会を得た時、私はこの機会を利用してメキシコ人の対日観を観察してみようと計画した。まる1年間メキシコを離れず観察を続けることができたわけではなかったが、新聞・雑誌に目を通し、テレビ番組に注意を払い、メキシコの国外にはできない現地での観察に時間をかけた。

1970年代末に発表した「現代メキシコの対日観」という拙論で、私は既存のアンケート調査の結果とメキシコの代表的新聞『エクセルシオール』紙に掲載された日本関係記事を分析するという手法で日本のイメージを探ったことがあった。当時のメキシコは日本の経済力を評価し、自国の発展と結びつけた経済大国日本への期待を現在と同様に持っていたが、他方でメキシコ人の日本人観には否定的な要素が目立っていた。日本人は不可解な民族で、かつメキシコ人の美的感覚からはほど遠くてやぼったく、文字どおりのエコノミック・アニマルのイメージがあった。

その後10年近い歳月が経った。1年間のメキシコ生活で私が知ることのできたメキシコ人の対日イメージは、端的に言えばアメリカと並ぶ豊かな先進工業国であり、古い伝統と洗練された文化を保持する近代国家となっていた。

### 1 世界地図から消えた日本と多様な日本の姿

「メキシコの公的な統計書の地図のなかから日本が消えているのを知っていますか」と、ある日メキシコに仕事でこられていた京都大学の経済学者に私は尋ねられた。その時、私は一瞬本当だろうかと思った。なぜかと言うと、その頃メキシコ市で生活していてメキシコ人一般にとって日本が抽象的ではるかかなたの東洋の国ではもはやなくなっていることを感じつつあったからである。しかし、経済学者の指摘は本当だった。メキシコ政府企画予算省統計局が毎年編纂している『メキシコ統計年鑑』(Anuario Estadístico de los Estados Unidos Mexicanos)と国家統計地理情報院が毎年出している『統計手帳』(Agenda Estadística)の世界地図から、日本は完全に消えていた。もっとも、地図とはいえ簡略な世界地図であるから、編纂者たちがアジアの小さな日本を見落してしまってもおかしくないとも考えられた。

しばらく私はこの「世界地図から消えた日本」にこだわっていた。すると、今度はテレビ番組のなかでメキシコ内務省ラジオ・テレビ・映画局(RTC)が提供する教養番組の前後にながれる画面の世界地図からも日本が脱落していることを発見したのである。RTCの番組はいくつかのチャンネルで毎日何回か流されているので、その前後には必ず日本のない世界地図が映される。前述の経済学者が言われた「メキシコの日本理解とはこの程度のものですよ」という言葉がRTC番組を見るたびに思

い出された。

しかし、メキシコ人がどのような日本観を持っているかに注目しながらメキシコで生活をしていると、メキシコ人の日本に対する関心と理解がもはやそのようなレベルのものではなくなっていることは明らかだった。驚くほど実に多様な日本の姿が少なくともメキシコ市では見られ、それがメキシコ人に受け入れられているのである。

デパートや大手スーパーへ行けば、高品質で有名な日本製品が並んでおり、日本のメーカーの電気製品やカメラがそろっている。日本製品は他国製品と比べて少し値段が高いけれど品質が優れていることはみんなが知っている。街に出ると「ツル」「ニンジャ」「サクラ」「サムライ」などの愛称で知られる日産の乗用車が走っている。高級車ではないが、これまたこれらの日本車の優秀さは広く知られている。街には少なからぬ数の、その名も「カブキ」「ショーグン」「ミカド」「サムライ」「フジ」などと名づけられた日本料理店がある。一流といわずとも日本料理店に入れば一人前で最低賃金の2、3日分は軽くとんでしまうだろう。それでも、メキシコ市内だけでも約40軒といわれる日本料理店のお客の7割はメキシコ人だという。

空手や柔道などの町道場はあちこちにある。月謝は安くはないし稽古着は高いが、そこに通うことはメキシコ人の憧れでもある。規模はさまざまだが、空手、柔道、合気道はいずれも全国連盟が組織されており、日本との結びつきを持っている。カラテカ、ジュードーカ、ニンジャなどは、一般庶民の普通の用語である。東洋武術を専門に扱った雑誌も、『ニンジャ』(Ninja)、『黒帯』(Cinta Negra)など数種類が発行されている。

全国の子供たちが学ぶ小学校の社会科教科書では、日本が世界の重要な国として扱われている。中学校の教科書になると、さらに日本に関する記述は多くなり、まぎれもなく世界経済のなかで大きな役割を果たしている日本の姿があちこちに現われてくる。しかも、子供たちにとっての日本は、このように教科書で学ぶ日本だけではない。家で

見るテレビ・アニメの多くが日本製である。スペイン語に吹き替えられてはいるが、ほとんどの子供たちはそれらのアニメが日本製であることを知っている。日本語で歌われる歌を聞き、日本の風物情景を見ることのできるアニメもあった。

日本映画もまた人気がある。もちろん、米国映画ほど何時でも何処でも上映されているわけではないが、メキシコ人が日本映画を見る機会は、日本人がメキシコ映画を見る機会よりも多いことは事実である。『メキシコ統計年鑑』には「国別映画上映回数」という項目があって、1年間に全国で上映された映画の上映回数が国別に集計されているが、日本映画の上映回数は米国、イタリアに次いで第3位の地位を占めている。この現象は、統計数字で得られた1974年から85年まで変わっていなかった。メキシコにおける日本映画の上映回数がメキシコに強い文化的影響を持つスペインやフランスの映画を凌いでいることは私には理解しがたかったが、大衆娯楽として観客を動員できる日本映画が全国的に繰り返し上映されているからなのだという。ただし、メキシコ人の間で人気のある日本映画とはニンジャとサムライものであり、子供向けのアニメーションであった。

日本語に対する関心も高まっている。日本語はまだ少数であるが大学でも教えられている。1988年8月に開催された日本語弁論大会は、メキシコ市内の四つの大学が共催した。メキシコ市内にある大手の日本語学校である日墨文化学院は每学期400名近い生徒を集めているが、生徒の8割が日本留学を目指すメキシコ人だという。確かに、日本政府が出す奨学金はメキシコの若者が得られる最も恵まれた奨学金の一つであり、それを得るための競争も厳しい。大学院レベルの学生に日本政府が出す12の奨学金に対して約2000人の若者たちが説明会に出席したという。

## 2 根強い伝統的イメージ

このようにメキシコにおける日本が多様な姿で

メキシコ人に受け入れられているとはいえ、歴然として存在するのは東洋の神秘と古い伝統芸術を強調した日本のイメージである。それはまた、日本側が最も強調するイメージでもある。

メキシコの日本研究者が日本の文化政策について皮肉を込めて発言する時に使う表現に「日本の公式イメージ」というものがある。それは、日本の伝統美と芸術で代表させる日本のイメージである。具体的には、洗練された美と芸術性を全面的にうたい文句にした墨絵、浮世絵、生け花、茶道、歌舞伎、能などの展示会や公演であり、文学作品なら三島文学や俳諧であり、スポーツなら柔道や剣道に代表される、日本が常に好んで持ち込む文化交流のだしものである。これらのイメージはまさに、日本人メキシコ移住90周年を祝った1987年と日墨修好条約100周年を記念した88年に催された日本関係行事の大半を占める催物でもあった。メキシコ市内の英字新聞は、アメリカ文化の神聖なるホームランドに侵入してきた日本文化という取り上げかたをして一連の日本の催物を皮肉っぽく紹介していたが、そのような雰囲気がないにしてもあらずであった。

私にとって興味深かったのは、このような日本側の催しがあるときまってメキシコの文化人たちが三島文学や歌舞伎・能を論じたエッセイを『エクセルシオール』紙や『ウノマスウノ』紙などインテリの読む新聞に載せることであった。これらの日本関係の催物や記事を通して知られる日本は、洗練された文化と繊細な美を保持する東洋の国として紹介されるのが普通である。

一方、一般大衆の間に定着している日本観は、これらの豊かな芸術性と伝統美を強調する日本観とはかなり異なっている。「グラン・カブキ」も「ノウ」も一般庶民には関係がない。メキシコの大衆は、日本に対して豊かな経済大国を想像するものと時代錯誤のはなはだしい時代遅れの日本を想像するものと両極端なイメージを持っている。メキシコの庶民の間では、日本の工業製品の人気とともに19世紀のヨーロッパに紹介された神秘とエキ

ゾチックな東洋の国が極端な姿で生き続けている。安っぽい芸者姿はなぜか「香り草」の飲み物の商標となり、頭痛薬が「ハポネス」（日本のもの）という名称であったりする。日本女性は常に19世紀の虐げられた女性か、オペラ蝶々夫人に代表される可憐な日本娘である。庶民の間でよく読まれているマンガ雑誌では、「ゲイシャ」、「ジュードーカ」、「サムライ」、「ニンジャ」、「カラテカ」などがよく登場する。

このような一般大衆が持つ日本観を凝縮したようなテレビ・ドラマが1988年に約半年にわたって放映され、メキシコ人の間で話題となった。「おゆきの罪」と題したこのドラマは、民間有力テレビ局が独自に製作したドラマであった。テレビ局が異例の製作費をかけ、一部日本で撮影したとか、メキシコ市郊外のアフスコの山中に大掛かりな日本の山村や東京の下町を想定したセットを組んだとか、主役のおゆきを演じたアナ・マルティンという女優はこの仕事のために2年も前から日本舞踊の手ほどきを受けたとか、日本人の特徴である細い目の印象を出すために特別のメイクをあみだしたとか、評判になった。放映が始まってみると、このテレビ・ドラマは、新幹線が走り、東京の赤坂に「赤坂プリンス・ホテル」が出現した日本を舞台にして始まったと思われたにもかかわらず、江戸時代と現代日本が混在した、日本人の目には奇妙なドラマの展開となった。おゆきの兄が最後まで浪人風のチョンマゲ姿であり、貧しい農村の生活と風景は日本のテレビ・ドラマ「おしん」のそれであった（「おしん」もまたメキシコで1988年9月から放映され、高い視聴率を得ている）。

しかし、テレビ・ドラマのおゆきはメキシコ人に、それも庶民に親しみの持てる日本女性として受け入れられた。庶民の集まる雑踏や市場で見知らぬメキシコ人から「おゆき」と呼びかけられた日本人女性は多い。私もその一人であった。多くの日系人の子供たちは学校で「おゆき」というあだなをつけられたという。そして、テレビ・ドラマの見どころの一つは、明らかにおゆきの芸者姿

であった。メキシコ人女優は豪華な着物姿で「ゲイシャ」を演じ、時にはおいらん姿にもなって視聴者の目を楽しませた。

### 3 教科書で描かれた知るべき国としての日本

メキシコの小学生が学ぶ教科書のなかで取り上げられる日本紹介は、必ずしも体系的とは言えないが、紙面の限られた教科書のなかで日本は少なくとも特徴のある、メキシコ人が知るべき国として記述されている。挿入されている絵や写真も含めて、全体的に工夫されて日本が紹介されている。

メキシコの教育制度では、小学校6年間は義務教育である。この義務教育過程で使われている教科書は文部省が編纂した全国同一内容のものが公立小学校の生徒には無償で配布されている。他方、私立学校は文部省教科書を使用することもできるし、数社から出版されている教科書のなかから自由に選択して使用することもできる。民間教科書も文部省の国家教育技術審議会の示す基本方針に従って書かれているので、単元の組み方などには大きな違いはない。ただし、単元末のまとめなどには各社の工夫が凝らされている。

メキシコの小学生がはじめて詳しく学ぶ日本は、16世紀から17世紀にかけて日本へ進出したヨーロッパ人に対してすぐにその野望と危険を見抜き、鎖国政策をとってその軍事的・宗教的侵略を防ぐことに成功したアジアの国として紹介されている（5年生教科書）。このとらえ方は、16世紀以降のヨーロッパ人の膨張がアジア、アフリカ、アメリカ地域の既存の社会・文化をどのように変えたかというメキシコの小学生が世界史を学ぶ時の基本テーマとなっているから、ヨーロッパ人に征服されたメキシコのその後の歴史的発展と関連して考えれば、わずか1ページほどのスペースで紹介された日本の歴史的経験を教師がどのように子供たちに教えるのか興味を湧いてこよう。

この教科書の使い方という点では、民間教科書の方が盛沢山である。たとえば、新教育技術社編

纂の社会科教科書では、「アジアのなかのヨーロッパ人—日本」という単元があるが、ここでは「日本」という見出しで日本の地図が描かれており、北海道、本州、四国、九州の名前を覚えるようになっていく。その次に「日本におけるヨーロッパ人」という見出しで16世紀のヨーロッパ人の到来と鎖国への過程が紹介されている。単元の終わりにつけられている練習問題を見ると、「日本人はなぜヨーロッパ人を追放したのでしょうか」、「日本はアジアのどこにありますか」、「日本の最初の住民はどこから来ましたか」という質問があり、また「調べてみましょう」という設問では「ヨーロッパ人が来たとき日本人の主な経済活動は何でしたか」、「16世紀の日本にあった宗教は何でしたか」、「日本は長い鎖国のあとでどのようにして再び西洋と接触したのでしょうか」などの学習課題が出されている。また、「知っていましたか」というコーナーがあって、ここでは5行にわたり「サムライ」についての紹介があり、「サムライ」の規範と精神は近代日本の軍部が受け継いだという説明になっている。もう一つのコーナーでは「日本からのヨーロッパ人の追放」と題した追加説明的な箇所があり、16世紀の日本の軍勢力および統治力はヨーロッパのそれに劣らなかつたこと、一時ポルトガル人をはじめとするヨーロッパ人の日本での活動を許したが、やがてキリスト教を脅威と見なし追放したと記述されている。

6年生の社会科教科書はメキシコを含めた世界史が中心となっている。文部省教科書を見ると、絶対王政期から現代までを扱っている八つの単元のなかで日本がまとまって紹介されているのは、「アジア・アフリカにおける植民地主義と反植民地主義」である。ここでは「日本の近代化達成と征服への抵抗」という見出しで約1ページにわたり17世紀の鎖国政策の背景、江戸時代末期の開国に至る事情と明治維新、そして20世紀初頭にロシアを破ったことが記述されている。この他に第2次世界大戦における枢軸国の一つとしての日本があちこちに出るが、詳しい記述はない。広島と長

日本人とメキシコ人の特質

日 本 人			メキシコ人		
順位	形 容 詞	人 数	順位	形 容 詞	人 数
1	頭の良い	29	1	陽気な	36
2	伝統的	25	2	宗教的	23
3	国粹主義的	20	3	社交的	20
4	規律正しい	19	4	頭の良い	19
5	意志が強い	18	5	衝動的	17
6	進歩的	15	6	個人主義的	13
7	宗教的	13	6	家族的結合が強い	13
7	慎重深い	13	7	のんきな	12
8	礼儀正しい	12	8	国粹主義者	11
9	親切な	11	9	伝統的	9
10	商売上手な	8	10	ずるい	8
10	因習的な	8	10	だらしない	8
			10	親切な	8

崎への原爆投下について簡単な記述もある。

以上の文部省教科書に対して、民間教科書は文部省の基準に従って書かれているとはいえ、細かく見るとかなり異なっている。たとえば、先にあげた新教育技術社編纂の6年生社会では、全部で25単元ある中の単元7「アフリカとアジアの植民地主義」に「日本の工業化」という見出しがあり、明治維新を中心に日本の近代化の過程が紹介されている。単元16の「大戦間の世界」というところでは「世界危機への反応としてのファシズム」という見出しでスペインと日本が取り上げられている。ここでは日本の軍国主義と近隣諸国への侵略に触れ、神の子と信じられた天皇の存在が強大な軍隊を形成するのを助け、天皇の命令で国民は誇りをもって戦い死んでいったと記述されている。

#### 4 理想化された日本—日本語を学ぶメキシコの大学生が描く日本像

世界的な傾向であるが、メキシコにおいても日本語を学ぼうとする人々の数は増えており、メキシコ市内にある主な大学でも外国語としての日本語講座が開かれている。そのなかでも学生数16万人を誇るメキシコ国立自治大学(以下、UNAMと略

す)で日本語を履修する学生は近年増えており、1987年の新学期に初級コース3クラス(定員90名)に登録を希望した学生数は約500名に上った。最終的に登録できた学生100名という数はUNAMの全学生数から見ればささやかな数ではあるが、それだけ日本語を履修する学生は日本へ強い関心を持っているともいえよう。

これらのUNAMで日本語を学ぶ学生たちが抱く日本観と日本人観を調べるために、1987年11月に初級コースに登録した学生を対象にアンケート調査を試みた。同種の調査として85年に日本語科が独自に実施した対日イメージ調査があるが、以下はこれら二つの調査結果から探ったUNAMで日本語を学ぶ学生の日本観および日本人観である。

UNAMの学生が日本語を学ぶ目的は、二つの調査結果ともはっきりと二分された。一つは、「日本の文化を知りたい」とか「自分の教養のため」に日本語を学ぼうとするものである。その場合日本人そのものと日本の文化に興味を持ち、「謎めいた」「神秘的な」ものを知りたいとする関心が著しく強かった。これに対して、もう一つは「日本へ留学したいから」あるいは「仕事を得るのに有利であるから」というものであった。日本留学を計画し

ているものに理工科系学生が多かったのも特徴である。

目的をもって日本語を学ぼうと決心したUNAMの学生が抱く日本観は、伝統と東洋美に代表される神秘とエキゾチズムの日本から、大量生産やエレクトロニクスに代表され、高度な工業と豊かな経済力を持つ日本まで、幅広く膨らんでいた。1987年の調査の「日本についてすぐ思い浮かぶものを三つ挙げて下さい」という問に対して、全部で99のイメージがあげられたが、寿司、ニンジャ、フジヤマ、ゲイシャなどのいわゆる通俗的な日本のイメージはまったく出てこなかった。

上記質問の回答上位10位までは、現代日本の経済および状況を思い浮かべるものと日本の文化や風景をめぐるイメージとにみごとに2分された。

「技術」を挙げたものでは、「高度な」「世界の最先端に行く」などの形容詞がつき、エレクトロニクスやロボットなどとともに、日本すなわち「高度な技術」というイメージがしっかりと定着していた。日本について自由に書いてもらった項目でも、「合理性と科学を追求する経済大国が古い伝統と洗練された文化を保有する理想的な国」というイメージがほぼ共通して描かれていた。他方、日本の文化を最初にイメージする学生たちの多くは、「謎めいた」「神秘的」という形容詞をつけながら、日本の伝統美を「洗練された」、「調和のとれた」、「長い歴史のある」と表現していた。

次に、日本人の特質をどのようにイメージしているかを探るため、調査では65個の形容詞を提示しそのなかから三つだけ選択してもらった。彼らの日本人観をさらに明確にするために、同時に彼らメキシコ人が自分たち自身をどのように見ているかも調べてみた。その結果をまとめたものがここに掲げた表である。これらのイメージから具体的に想像できる日本人像は、非常に知的で規律正しく進歩的であると同時に自国の文化と伝統を大

切にする民族であろう。この日本人像に対して、個人と家族を大切に、陽気で社交的なメキシコ人像が描かれている。

日本および日本人に対するイメージが膨らんでいるわりには、日本についての具体的な事実関係はほとんど知られていなかった。1987年のアンケート調査では、日本の作家、主な文学作品、政治家、科学者および日本の工業製品について具体的な名前を三つずつ挙げる質問を設定したが、工業製品を除くとほとんど知られていないといっても過言ではない結果となった。

### 結びにかえて

「ハイテク・経済大国とサムライ・ゲイシャ」という両極に分かれた日本のイメージは、世界に共通したものであるようだ(川竹和夫『ニッポンのイメージ』を参照)。メキシコにおいても一部の知識階層や日本語を学ぶ大学生たちの間ではそのようなイメージが薄れているとはいえ、以上で紹介したように一般的にみれば「サムライ・ゲイシャがハイテクを駆使した乗用車を乗り回しているのが日本」というイメージが強いと言ってもいい。そして、この両極に分かれたイメージは交流が増えマス・メディアによる情報が増すことによってより強化されているようにさえみえる。

メキシコの場合、米国やヨーロッパ諸国と異なって日本研究センターや文化センターなど日本に関する情報を提供する機関がきわめて貧弱であるという問題がある。地味ではあるが、現在メキシコ人が持っている好意的な対日関心をより深い日本理解へと発展させるためにも、現在なきに等しいメキシコ市の日本文化センターをせめて欧米諸国並みにする努力や日本研究体制への支援が、日本のやるべき緊急課題であるように思われた。

(くにもと・いよ/中央大学教授)